

犯罪王リコ (1930)

LITTLE CAESAR

メディア 映画

ジャンル 犯罪 アクション

製作国 アメリカ

色彩 B&W

時間 80分

初公開日 1931/10

公開情報 劇場公開

【解説】

「民衆の敵」と共に30年代初頭のアメリカ大衆に反暴力の世論を大いに煽った、ギャング映画の代表作であり、冒頭にも、両作の主人公が一人の实在のギャングの裏と表を現わすのだーと断り書きが付く。ダンサー志望のジョー（フェアバンクス・Jr）と地方都市でくすぶっていたチンピラのリコ（ロビンソン）は、東部に出て一旗あげるのだーと相棒を説明して、NYの暗黒街に潜り込む。そして、ボスのヴィットリーがライバルのアーニーのカジノを襲う計画の陳頭指揮を執り、市警のマクルーア捜査主任を射殺。ボスも追い落して実権を握り、“ビッグ・ボーイ”と呼ばれるドンに認められるが、再びジョーを仲間に引き入れようとして、その密告で後任の主任フラハティに追い詰められ、一の子分のオテロを殺され、自分は古巣のドヤ街に埋もれてしまう。なおも執拗なフラハティの追跡は、新聞に彼の中傷記事を載せるという形で続き、それに乗ったリコは、抗議電話を逆探知され、ジョーとその妻のダンス・チームの看板の裏に潜んでいる所を、機関銃で撃ち抜かれて死ぬ。直情を絵に描いたような「民衆の敵」の主人公トムに較べれば、旧友ジョーとの絆に拘わり続けたリコはより人間的で、ロビンソンはその辺を抑制された演技で的確に表現してさすがである。ただ、描写自体の即物的なタッチに引きかえ、“ハードボイルド”に撒し得ぬそこらが弱点ともなった気がする。

【クレジット】

監督	マーヴィン・ルロイ	Mervyn LeRoy
原作	ウィリアム・R・バーネット	William R. Burnett
脚本	フランシス・エドワード・ファラゴー	Francis Edward Faragoh
脚色	ロバート・N・リー	Robert N. Lee
撮影	トニー・ゴードイオ	Tony Gaudio
出演	エドワード・G・ロビンソン	Edward G. Robinson
	ダグラス・フェアバンクス・Jr	Douglas Fairbanks Jr.
	グレンダ・ファレル	Glenda Farrell
	スタンリー・フィールズ	Stanley Fields
	シドニー・ブラックマー	Sidney Blackmer
	ラルフ・インス	Ralph Ince
	ジョージ・E・ストーン	George E. Stone